

393-756



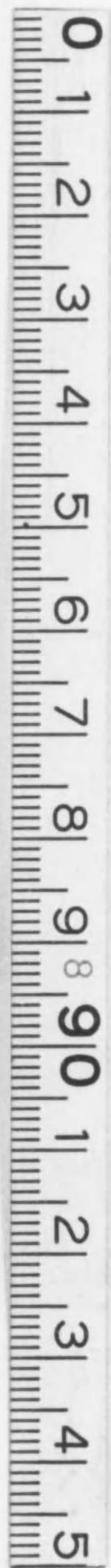
1200501462601

393

756

0

複写



始



26. 5. 15

外 2093

<



東亞研究講座第十五輯

の金銭慾

井上紅梅



東亞研究講座第十五輯

393-756

2298



支那人の金錢慾

井上紅梅

支那人の金錢慾に就て、西洋人はシャイロック風の殘忍酷薄のものとして扱つてゐるが、實際は決してそんなものではない。恐らく彼等は海外出稼ぎの支那人の性行を見て、一種の猶太風の色眼鏡を掛けたのであらう。

一口に支那人と言つても開港場にゐて、外國人を食ひ物にしようと思つてゐる支那人と、奥地の都市にゐて、先祖の仕事を繼承してゐる支那人とは、だいぶ性質が違ふ。

けれど概して金錢勘定は中々綿密である。日用の買物も日本人のやうに盆槍してゐない。先づ何が一斤いくら、といふことを訊いて、それは高いと言つてネギリ、話がきまつて、今度は秤目の争ひである。ほんとに錙銖の利を争ふのだから中々時間が掛る。一方商人も人柄を見て値段に甲乙を

つける。「眞不二價」^{チンフエツ}といふ看板が何處にも掛つてゐるが、そういうことを講はなければならぬ、といふのが二價ある證據で、旦那風の者が野菜など買へば、ボーイが買ふよりもどうしても高い。同じやうに賣られてはボーイの儲けがなくなるので、商人の方もチャンとお察しよく割引する。人手を潜れば親子の間でも口銭がつく。

莊子が「朝三暮四」と言つてゐるが、支那の商人も随分その朝三暮四をやる。初めてのあきない馬鹿に安賣するが、馴染になつて足繁く通ふとだん／＼高くなる。殊にお茶のやうなものは、葉を見た丈けでは一寸見分けがつかないから、番頭によると随分悪いものを平氣で押しつけることがある。兩目も多い時と少い時がある。始終買つてゐると、それが平均して結局同じことになるが、一般に若い綺麗な女に對しては法外に安賣をする。隨てその次に買物する男は飛んだ貧乏籤を引いて、女に安賣りした丈けの損失の埋め合せをつけられる。此現象は肉や鶏のやうな切賣物に多い。

だいたい錢相場が始終動搖してゐるので、店によると一元に對し銅貨二三枚から十枚位の開きがある。だからこまかい物を買ふ時には、兩替屋で銀貨を銅貨に崩してつかはないと、貨幣その物丈けで多少の損がゆく。

かういふ風に支那人の頭には錢勘定がしよつちう附纏つてゐるが、それが子供の中から慣れツこになつてゐるので、少しも苦にならない。却て計算能力が發達して、どんな無學の者でも銀貨のよしあしを見分け、暗算の早いことは驚くべしである。一つは麻將^{マツヤウ}のやうな勘定の面倒な賭博をやるせいかもしれない。錢勘定がこまかいから親子兄弟の間が割合に冷淡のやうに見えるが、よく見るとそうでもない。長兄が弟に財産を分けない場合には、弟夫婦を一家に置いて長く養つてゐる。又別家した兄弟の一方が富み、一方が貧しくとも、富める方は貧しい方を援助する場合は甚だ少いが却て夫人の里方などに引け道がある。これは日本にも多くあることで、支那として格別のことはない。

支那人は交友に重きを置く。同じ方面の仕事をする仲間内のつきあひである。官吏は官吏の仲間がある。商人は商人の仲間がある。職工は職工の仲間がある。泥棒は泥棒の仲間がある。いづれも徒黨組合があつて互に相接け合ふ。水滸傳は泥棒仲間の結束の固いことを示し、儒林外史は讀書人仲間の交友の厚いことを示してゐる。

貧乏の讀書人が一旦試験に及第すると、それが未だ役目にありつかぬ先きから、先輩の官吏は極

力援助する。或は家屋敷を與へる者、或は金品を贈る者などがあつて、きのふまでの一寒書生が忽ち相當の暮しをして將來互に聯絡を取る。だいたい官吏といふものはいつ失職するかしれないものだから、二重にも三重にも網を張つて置かないとあぶない。それが即ち一種の美しい友情となつて現はれるのである。

商人も日本のやうに無茶な競争はしない。場所の偏僻なところは品物が高い。繁華な中心地は品物が安い。一二町離れてゐると一二仙の相違がある。五六町離れてゐると五六仙の開きがある。それが何處まであがるわけでもないが、兎に角何分高か何割高である。上海のやうな處は賑やかな場所があちこちにあるので、値段も略ぼ一定してゐるが、地方の都市へ行くとそれが格別に目に付く。

大きな商人になると地方的の組合があつて、自派の者が難關に遭ふ時には互に相救濟する。相場に對する感覺も頗る敏活に働く。これは前にも言つた通り、通貨が始終動搖してゐるので、對内の商賣も對外の貿易と同じやうな意味になるからである。だから始終品物の相場を見ると同時に、通貨の相場を見てゐなければならぬのである。一元に百六十枚の銅貨が僅か三年間に二百六十枚に低落する。實に荒ッぽいことである。金銀の高低は世界の影響を受けると同時に、日本の爲替相場

などにも關係があつて、それがトキム／＼隨分早足に亂高下するのだから、大商人はいつもそれに注意してゐなければならぬ。そのほか政府保證の銀行紙幣などがトキム／＼不渡りになる。そういふことで度々損をしつけてゐるから中々諦めがよい。「阿要壞氣」とか「運氣不好」とか言つて泣寝入りである。

地方では米錢商といつて米屋が小錢の兩替をする。此米錢商は案外確實で、案外錢が儲かることだらうと思ふ。毎年年末になると米はいやでも應でも高くなる。ふだんよりは二三割乃至四五割の開きがある。物價は米ばかりではない、何物も上るのであるが、米が一番確實である。それに銅貨の變動があつてやうに激しいのだから、二三年持ち堪へる力さへあれば銅貨だけでも可成りの利益がある。なまじい工場など設けて職工のストライキや増税でいちめつけられるより増しかもしれない。併しこれは掠奪に遭ふ恐れがあるので、近頃のやうに動搖してゐては中々むづかしい。

昔の地方官は商業に投資してゐた者が随分多かつたやうである。米屋、薪屋、質屋、呉服屋、雜貨屋、鹽醬油屋などに、地方別に萬遍なく投資して、一方が不景氣の時には、一方の景氣で補なひをつける方法である。范蠡が官を退いて商賣人になつたが、近代の支那人にもそつういふ人物が多い。

盛宣懷や張謇など事業家として立派な成績を挙げた。一般に理財の觀念が強くなり子供の物賣などが非常に多い。

商家の手代などは中々手堅い。店は一切番頭任せで、主人はぶら／＼遊んでゐるが減多に間違ひはない。小僧を買物に出しても胡麻化すやうなことはしない。彼等は下男やボーイとちがつて、將來番頭さんになつて商賈人仲間にならねやうとするのだから、信用を重んずる心が自然に備はつてゐるのである。

北京は政治ゴロが集るところで、上海は商賈ゴロが集るところである。兩方とも随分金づかひが荒い。北京は官尊民卑で、上海は民尊官卑である。一方は花柳界に陣取つて政治問題を處理し、一方は藝者屋遊びをしながら取引の相談をする。

支那人の遊びはお酒を飲んで、料理を食べて、阿片を飲んで、博奕を打つて、それから所謂シケ込むのだから中々念が入つてゐる。地方から得意筋の主人又は番頭が見えたと、先づ料理屋に連れ込み、それから藝妓屋、それから料理屋、それから又藝妓屋といふ風に、滞在中は酒池肉林の歡待を受けて、宿屋に歸つて寝る暇もない位である。そうして陪客が多いので、それからそれへと知合

ひが出来る。中にも随分如何はしい山師などが交じつてゐることがある。何しろ上海は見掛けが好くなくてはいけぬ。金使ひが荒くなくてはいけぬ。そうして掠鳥の引掛るのを待つてゐるのである。藝妓なども纏綴や藝は二の次ぎで、家の構が大きく設備が好く、衣裳や裝飾が立派ならば、金に糸目をつけないで我れも我れもとそこへ集る。これを支那人は名氣が響くといふ。客も藝者も無いものがあるやうに見せるのだから、無理が多い。借金をする。賭博をする。相場をする。そうして愈々行き詰まれば強盗か、恐喝か、詐欺か、横領か、自殺である。年々そいふ事件が夥しく發表されるが、これは地方にはないことである。上海特異の現象である。外國人が來て大きな商賣をする。大きな工場を設ける。地方の商人が集る。品物がコナれる。新事業が興る。職工を集める。凡てが旋風のやうに活動するので、其活動に乗じて浮揚しやうと思ふ者が多いからである。

だいたい實質を重んずる國で頑固でドシリとしたものが好きだ。清朝末期には、繊弱な美人が井戸側のやうな金の腕輪をいくつも嵌めて随分目方のあるものを平氣で身につけてゐた。道樂息子が芝居で役者に祝儀をやるのに大きな銀貨を何枚も舞台の上に抛り出した。男の眼鏡も頗る大きなものを好み、扇も又頗る頑丈な親骨の長いものを好み、男の靴も頑固に見せるために爪先きを方形に

して、二本の線を入れて上に少し反り上げてある。女の靴はこれと反対に極めて小さな先きの尖つたものであつた。

革命は彼等の嗜好の轉換期で、だん／＼華奢な輕装を好むやうになつた。腕輪の代りに腕時計など用ゐるやうになり、髪結びやうもあつさりして、花なども餘り挿さなくなつた。纏足が廢つたので女の靴は大きくなつたが、縫ひ目の裝飾など簡單で輕けに出来てゐる。

室内の器具も在來の物は凡べて頑固で無器用な物が多い。寢台も寧波寢台などは疊三ちよう敷き位の廣さで、紅木に葡萄や蝙蝠などを彫刻し、大理石など嵌め込んだものもあるが、近頃は鐵ベッドや眞鍮ベッドの磨き出したものを用ゆ。枕は鴛鴦枕といふ隨分華美な飾りつけの物を用ゐてゐたが、近頃は白い覆ひを冠ぶせた簡單のものが多い。夜具蒲團は紅、綠、水色などのけば／＼しいのを好み、幃子チヤンシを利用したのが多い。幃子チヤンシは婚禮や店開きの時、祝ひ物として友達から贈らるゝ時壁間の裝飾張で、長さ五六尺、幅四五尺の紅の絹緞に金紙の芽出度い文字を貼りつけたものである。これは紙さへ取れば其儘のキレ地であるから蒲團の表になる。かういふ一時の裝飾物も其場限りでなく、後ち／＼役に立つやうに考へてゐる。其他の諸道具も西洋の物や、日本の物がゴチャ／＼に

這入つて、隨分體裁のいゝ華奢な物も混用してゐるが、支那人の眞の嗜好は體裁よりも長持ちのするツブシの利くものである。古道具や古着などもなか／＼上値に賣買され、質屋も値をよく取つてゐる。それでゐながら質札なども大事にして愈々困ると其質札を知人に買つて貰ふ。極貧の者は路傍に店を張つて二三枚の質札を賣る。

藝者屋なども客を相手に冒險をしてゐるやうなものである。藝者の玉代は上海では一回一元で其場で拂はず年に三度の節期勘定である。枕金も小先生(半玉)を除いては高々二三十元位のものである。尤も其前に花酒ホウサケと礎和ソウワ(酒宴と賭博)に四五十元の金が費るが、それも八九人の客を喚んで酒は飲み放題であるから藝者屋の儲けといふものは大してあるものではない。おまけに玉代を支拂はずに馳の道になる客がある。金持も中々勘定高く、最初から無暗に金をつかふものではない。段々情に引かされて女の爲に何百圓、何千圓の装身具や裝飾品を買つてやることになる。金銀細工商も二割引ならいつでも買戻すといふ保證をしてゐる。隨分純金量の少いものでも平氣で買ひ戻す。かういふ方法でなければ一般の氣受けがよくない。よくない筈である。本來藝妓は現金で貰ひたいのにそれでは體裁が悪いから、客を金銀細工屋に連れ出して品物を買つて貰ふのである。

支那では財神菩薩といふものを家々に祀り、又到處にその廟がある。不景氣の時には其財神廟に證文を入れて何千元でも何百元でも入用の金を借りる。勿論架空的に借入れるので現金を受取るわけではない。あとで景氣が好くなつて商賣が繁昌すると、其借金をかへすといふ意味で、紙製の馬蹄銀を神前に焼く。

家に病人があると、一揃の箸をどんぶりの中に立て掛け、水を少しづゝ垂れ掛け、いろ／＼の事を聴く。「お前はおちいさんか。おばあさんか。あゝお爺さんだつたか。お前は何が欲しい。着物かえ、お金かえ、それとも旨い物が食べたいのかえ」などときく。そのうち箸が濡れ附いて立つ「あゝ矢張りお金なんだね。それではあしたお金を澤山上げますからどうぞ、病氣をなほして下さい」といふ。翌日紙製の馬蹄銀を澤山買つて来て、玄關先きで焼く。そうすると金が空へ昇つて亡き人の手許に届くそうである。

お正月の挨拶は「恭喜恭喜」「發財發財」である。恭喜はおめでたう。發財はお金が儲かりますである。

お正月初めて庭を掃く時「一掃金、二掃銀、三掃聚寶盆、聚寶盆裏有箇寶、子々孫々用不了」である。「一度掃けば金、二度掃けば銀、三度目には聚寶盆。聚寶盆の中には寶があつて、子々孫々までつかひきれない」

ふだんの挨拶に「備飯用過了」あなたは御飯を上りましたか、と訊く、きかれた者は「飯喫過了」食べましたと答へる。食べませんと答へるのは失禮である。それが時分どきで主人の方で本當にそういふ意志があつて訊くなら格別不思議もないが、時と處とを構はず顔を合はせるたびにそんなことをいふ。人間は何よりも飯が必要である。だから飯を食べたかときくのは「御無事で被在いますか、お變りもありませんか」といふやうなもので、「食べました」と答へるのは「無事で御座います、相變らずです」といふ意味だから少しも可笑しいことではないが、餘りに飯に重きを置き過ぎて、露骨でけびてゐるやうに聞こえる。

支那人は凡べてが打算的であるから、利害が共通すれば、そこに一種の義理人情が湧いて来て、結束が強固である。不買同盟とか不賣同盟とかいふことは支那でなければ出来ないことである。近頃内政が始終ゴタ／＼して思想上にも非常な變化を來たしてゐるが、要するに各派の利害關係が均分しないからである。前清時代には科學の試験があつて智識階級の志望をそこへ繋ぎつけ、官職と

いふハケくちがあつた。彼等は彼等の仲間内で互に救合つた。ところが革命以後さういふ筋道が絶えて、智識階級は民黨に奔るか、軍閥にゆくか、實業界に這入るか、又近頃では共産黨となつて職工を操るか、いづれかに行かなければならない。彼等は行くところとして利害關係が皆ちがつてゐる。そこで一方が起きると一方が倒れ、年百年中おし合ひへし合つてゐる。それに列國の援助が一種の平和的壓力となつて始終動搖してゐるために、支那は三角に歪んだり四角に曲つたりする。若し列國が申合せて、支那から完全に手を引けば、支那の黨争や各自の利害關係は案外早く整理されて世は太平になるのであらうが、中々そりはゆかない。今まで莫大な資本を注ぎ込んだ國もある。長い間かゝつて商業上の地盤を固めた國もある。しんきに企業を起さうと思つて骨折つてゐる國もある。新思想を吹き込んで自國と同様の國體に更へさせやうと思ふ國がある。さういふ勢力が四方八方から集つて来るのだから、いつになつて治まるかしのれない。

だが支那人には強固な愛國心がある。如何なる時代でも排外といふことは絶えたことはない。彼等は異邦人に征服されて満足してゐない。元朝は九十年、清朝は二百七十六年で倒れた。かういふ長い間じつと我慢してゐる支那人の辛棒強いことは驚くべきものである。一時露西亞の力を借りて

も支那は決して露西亞風に赤化すべきものではない。孫文の三民主義は新支那の新愛國主義である。

昔から絶え間なく内亂はあるが人民は格別苦にもしないで好く働いてゐる。彼等は折角貯め込んだ金を掠奪されても、絶望もせずには又稼ぎ初める。「上海の或る新聞社の門番が、ながん貯め込んだ何百元かの金で、妻を買つたところ、其女に悪性の梅毒があつて忽ち傳染し、主人の好意で醫者の手に罹つてすつかりなほして貰ひ、妻と手を切つた。彼れは此事から女にコリ／＼して身の行末を案じ、田舎に地所を買はふと思つた。そこで又何年かかゝつて五六百元貯め込み田舎に行つた。田舎は四川の奥地で爲替料なども馬鹿に高いので現金を持つて出掛けると、途中土匪に遭つて棍棒で打たれて氣絶した。氣が付いた時には大事の金が無くなつてゐた。大概の者なら失望して自殺でもするのであらうが、其男は一向平氣で乞食をしながら、上海の主人の處へ歸り、元の通り門番を勤めた。そうして又何年間に何百元の金を貯め込んで、やうやく今新妻を娶つて睦しく暮してゐる。」支那人は或る目的のために金を貯めてゐるので、金を貯める間は非常に執着力がある。けれど一旦災難に遭つてそれを失つたら、諦めがいゝ、今古奇觀に左のやうな話がある。

宋の頃、汴京(今の河南開封縣 北宋の首都)に住んでゐた金維厚といふ人は、才取渡世をしてゐ

たので、いやでも朝は早く起き、晩は遅くなつて寝たが、目が覺めるといろ／＼考へ、中でも充分見込みのあるものを選んで稼業にせいだしたので、後には暮し向きの心配もなくなつた。そこで今度は一層末長い計畫を建て、日々の出し入れは碎銀を用ひ、性のいゝ大きな銀を手に入れた時は、しつかり握り締めて、それが百兩とまとまると鑄なほして大きな銀錠を作り、紅真田で腰をゆはえ、枕許に置いて、夜になると一遍それを撫で廻してから睡つた。かうして一代に鑄なほした銀は都合で八つ、八つから先きは銀は急がしく出入りして、ついで百兩と握まることがないので、彼れはもうどうでもいゝと思つた。

金ぢいさんには四人の男の子があつた。折柄爺さんの七十の誕生日に當り、彼等は祝ひ酒の用意した。金爺さんは四人の子を見ると、皆成人して尤もらしい顔を描へてゐるので嬉しくて堪らず「乃公は一生の間ずゐぶん苦勞もしたが、かうやつて今無事に其日を送ることが出来るやうになつたのは、天の神様のおめぐみだ。その上ふだんから用心して、八つの銀錠を鑄上げ、大事に枕許に置いて一對づゝ紐で括つてあるが、いづれいゝ日を選んでお前達に分けてやる積りだ。お前達は一人で一對づゝそれを取つて鎮家の寶とするがいゝ」

といひわたした。四人は喜んで酒を飲んで別れた。金爺さんはその夜ほろ酔ひ機嫌で、枕許に燈火をつけ、チラ付く眼さきにキラ／＼光つた白いものを、何遍となく撫で廻しながら、ハハと一聲笑つて睡つた。その寝入りばなに、ふと聴きつけた足音は寢台の前の方から起つた。おや／＼泥棒ぢやないか、とじつと聴いてゐると、それは来るやうでもあり、來ないやうでもあり、お互に譲り合つてゐるやうな風で、ほんのり明るい枕もとの燈火に帳をかゝけてみると、これはしたり八人の大男が揃ひも揃つた白装束で、腰に紅帯を結び、身を僂めて前に進んだ。

「わたしども兄弟は天の定めた受持ちで、御當家の御用を聴いてをりましたが、旦那様の過分な御寵愛を受け、お蔭を以てこんなに成人し、走り使ひもさせられず、ながねん大切にしてお戴きました。が、そろ／＼期限が近づいたので、旦那様がお隠れになつてから、ほかへ移らうと思つてをりましたところ、只今伺ひますと、わたしどもを若旦那様に分けてやるのお話。だがわたしどもは若旦那様と元から何の因縁もないので、今此處でお暇乞ひをして何處其處の何村の王といふ人の處へ身を寄せます。未だ御縁が全く切れたわけでは御座いませんから、いづれモウ一度お目に掛ります」といひ畢るとすぐに、引返して出て行かうとする。

金爺さんは何事か知らんと肝をつぶして床から飛び下り、靴も穿かずに駈け出してゆくと、ずつと向ふの表門を出てゆく四人の姿を見たので、氣短かに逐ッ付かうとする途端に、敷居に蹶躓いてぶツ倒れたかと思ふと夢覺めた。

金爺さんは氣が氣でなく燈芯を掻き出して枕許を照し、隅から隅まで調べて見たが、もう八ツの銀錠がない。夢の中の言葉を仔細に味つてみると、一々思ひ當る節があるので、あゝと思はず嘆息し、しばらく啜び泣きに泣いてゐたが

「わたしが一生涯かゝつて積み上げたものを俵に分けてやる事が出来ないで、よその家へ行つて仕舞ふとは、そんなことがあるわけはない。だが場所と姓名をハッキリ明してあるから、いづれそのうち行衛を尋ねてみることだ」

と夜ツびて睡らず、次の朝早く起きて、先づ俵達に此話をする、俵の中には驚いた者と、疑つた者とあつた。驚いた者は

「これはわたしどもの手にすることの出来ない品物だから、まのあたり不思議を見せたのだ」と思つた。

疑つた者は

「年寄りが嬉しさのあまり、浮かとわたしどもに許したが、又思ひなほしてみると、片時の間も見捨て兼ね、分けるのがいやになつて、あんなありもしない嘘バシを作つたのかもしれない」と思つた。

金爺さんは子供等の半信半疑の體を見て、一刻も早く、此話の鼻をつけようと、遂に何縣何村に行つて見ると、果して王と名乗る人があつたので、門を叩いて這入つて見ると、客堂の前にあか／＼と蠟燭をともし、三つの犠牲を供へて丁度今そこで神祭りをしてゐた。金爺さんはすぐに話しかけ「お宅に何か變つた事があつたので御座いますか」

ときくと、家の者は主人に取次いだので、主人の王老人は早速出て來て挨拶し、席を進めてその用向きをたづねた。金爺さんは少し口籠りながら

「實は手前どもに一寸變なことが御座いまして、その安否をたづねるために、わざわざお宅に伺ひましたところ、只今拜見すると、神祭りをして被入いますが、これには屹度いはれが御座いませう。どうぞ打ち明けてお話し下さいませ」

と頼んだ。王老人は

「ハハアそういふことでお越しになりましたか。實は私しどもの家内がふとしたことから患らひ付き、占内者うらなひしやに見て貰ひますと、寢床の位置を替へればなほる、といふので御座いましたが、ついそのまゝにして置く中、きのふ家内がうとうとすると、白装束の大男が八人、腰に紅帯を結んで現はれ、私どもはもと／＼金家の者で御座いますが、今度あちらと縁が切れ、お宅に身を寄せることになりました、といひ畢るともろともに床の下に潜り込みました。家内は驚いて、びつしより汗をかくと同時に身體が軽くなつて、床を移してみると、塵の中から出たのが八つの大銀錠で、しかも皆紅真田で腰をゆはえてありました。これは何處から來たのか知れませんが、どうせ神様のお授け物に違ひない、と早速お供物を買つてお禮を述べてみると、御座います。今貴方がお尋ねになつたのを見ると、むろんその來歴を御存知ないことは御座いますまい」と語つた。

金爺さんはよろ／＼して

「これは私しが一代の間に積み上げたもので御座いますが、わたしもきのふ夢を見て、目が醒めた時にはモウ見當らないので御座います。夢の中のお告げにこちらの住所姓名をたしかめ、根を鑿つて此處まで來てみると、既に運の盡きたあとで、どう仕様もありませんが、只一目拜見させて戴く

ことが出來ますればそれでわたしも氣が済みます」

「おゝそれは易いことです」

と王老人はいそ／＼出て行つたが、よもなく四人の小僧が四つの盤を運んで來た。一つの盤には二つの銀錠を載せて、いづれも紅紐で縛つてあるのを見ると、これこそ紛れもない金家の物であつた。金爺さんは眼を睜つてゐたが、今更なんと仕様もなく、覺えず涙をハラ／＼と流し

「わたしくらゐ運の悪い者は御座いません。これを身に受けて使ひきることが出來ないので御座います」

と言つて一遍撫で廻した。王老人は小僧を喚んで銀をもとへなほさせたが、金爺さんの様子を見ると氣の毒で堪らず、別に三兩の碎銀を封じて餞別とした。金爺さんは

「自分のものでさえ此通り福德がないのに、人様のお恵みを受けることは以ての外で御座います」

と再三辭退してどうあつても受取るまいとするのを、王老人は無理に袖の中に押込んだ。

金爺さんは探り出して返へさうとすると、急に見つからないので思はず顔をあかめたが、王老人からひたすら強ひられて、ぜひなく一禮して別れ、すぐに家に歸つて俸達の前で、此話をして聞か

せると、一同がつかりして溜息をついた。そこで王老人のいゝ話も聞かせ、別れる時、三兩贈つて呉れた、と袖の中を掻き廻してみたが、更に手當りがないので、おや／＼これも途中で落したのかといふより外はなかつた。

ところがそうではなかつた。金爺さんが押し戻した時、王老人は彼れの袖の中に無茶苦茶に突込んだので、銀は重ねた袖の外側の方に落込んだが、そこに絲抜けがあつて、さぐつて返さうとする時には、もはや門の敷居の邊に抜け出してゐたのである。お客が歸つたあとで門の掃除をして、それを拾ひあてたのは元の持主、王老人であつた。

してみるとたつた一口の水も、一掴みの米もチャンと前から定まつた約束があつて、そのぬしでない者には八百兩は愚か、三兩の金も身に着かないが、其ぬしであつてみれば八百兩は愚か、三兩の金も出て行かない。もとから有る者は無くなつて、もとから無いものが生れて来る。こればかりは決して人の算段通りにはならない。

今古奇観は廣く行渡つてゐるので、何人も知らない者はない。支那人の金に對する觀念は、かういふ教訓から養はれて來たのであらう。勘定が細かいから守錢奴が多いかと思ふとそうでもない。隨

分友達の難儀を救ふこともある。兎に角仲間を多く作つて賑やかに暮らすのを好む。居候も平氣で置く。日本人よりも餘程大マカで偉いところがある。(完)

393
750

昭和二年九月五日印刷
昭和二年九月八日發行

複製轉載を禁ず

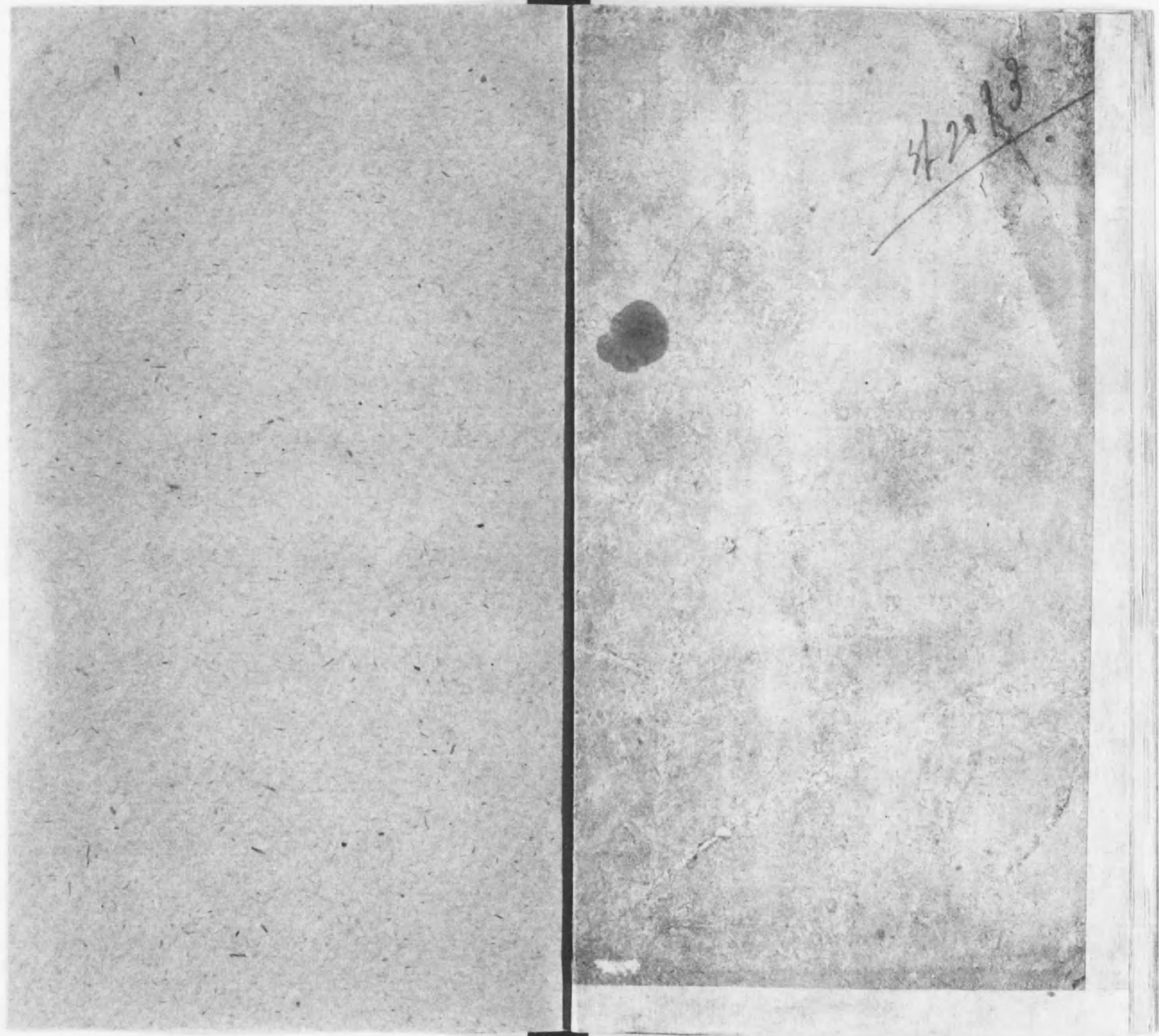
東亞研究講座第十五輯『支那人の金錢慾』

編輯者 磯部榮一
東京府西巢鴨町池袋千二百五十八番地

印刷者 久保民生
東京市芝區南佐久間町一丁目一番地

印刷所 商務印刷所
東京府西巢鴨町池袋千二百五十八番地

發行所 東亞研究會
(振替口座東京五八九二九番)



422/3

393
756

終

〇
複写